

システム開発における「ユーザとベンダの壁」の解消に向けた 日本ベンダ企業向けDX対応策の提案

山中 淳也（株式会社NTTデータアイ）
 錦 雅和（富士通株式会社）
 中島 雅貴（株式会社NTTデータ）

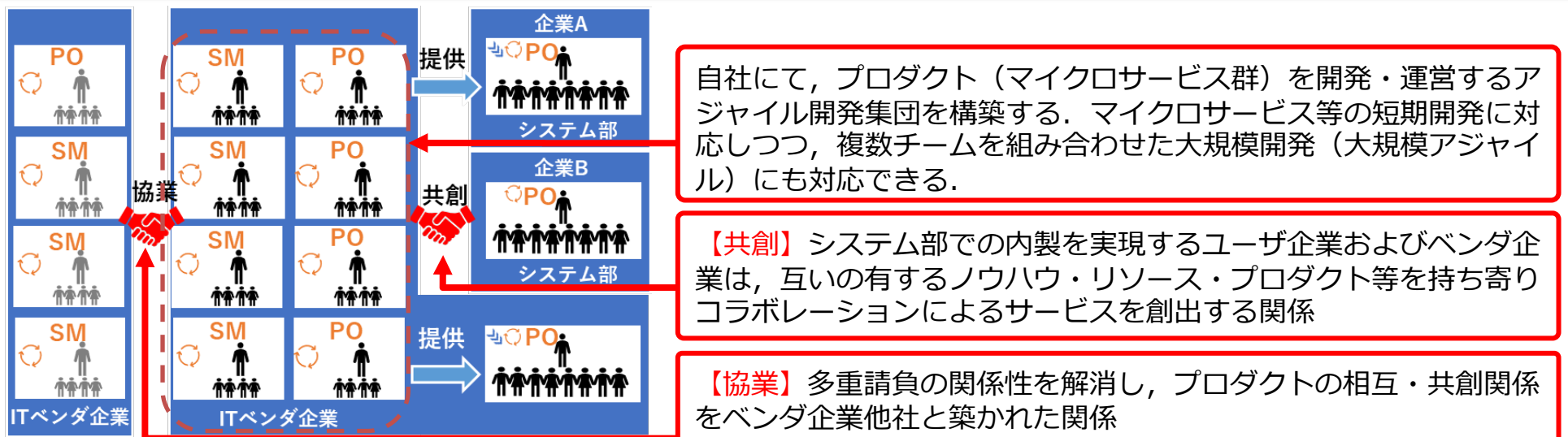
DXレポートの課題/着目理由

経産省公表のDXレポート2.1では、システム開発において「ユーザとベンダの壁」が存在し、双方の関係が「低位安定の状態」となっており、新たな価値の創出およびデジタル競争の勝ち抜きが困難である旨の問題提起がされている。メンバ内にて本問題を実感するエピソードが多数あり、本問題を解決する必要があるという共通認識を持った。

手法/ツールの適用による解決

「ユーザとベンダの壁」に関する問題についてメンバのシステム開発の業務経験を踏まえ、ブレインストーミングおよびKJ法を用いて、「顧客との関係性」「組織/体制」「変化への対応力」の3つの問題の観点を抽出し、各問題の観点に対する解決策を検討した。ここまでの手法で明らかとなった問題および解決策を基に具体的な対応策を下記の通り提案する。

ユーザ企業とベンダ企業の関係の「あるべき姿」



「あるべき姿」に至るためのファーストステップ

現状

第1段階

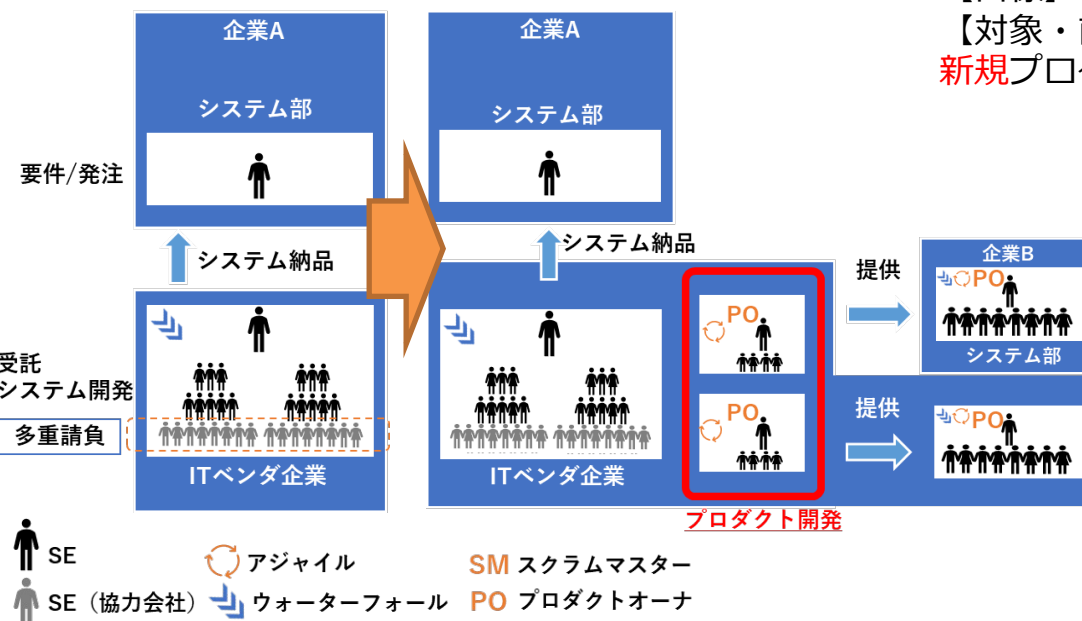
【目標】 新規自社プロダクト開発着手・短期開発ノウハウの蓄積
 【対象・前提】 現行システムの開発・運用は維持しつつ、**小規模新規**プロダクトを対象

【アプローチ】

①開発組織の新設：既存組織内でのアジャイル開発は現行組織の業務状況等が障害となるケースがあるためアジャイル開発特化の独立開発組織とする。

②開発手法・アーキテクチャ：一般的なアジャイル開発手法に取り組み、マイクロサービスアーキテクチャ・アジャイルのプラクティスを導入する。

③ステークホルダとの関係の再定義：受発注ではなく、サービス提供の形をとる。短期開発ノウハウの蓄積のため、構成員は自社メンバのみとする。



今後の課題

理想像のイメージ化および第1段階の概要の定義に留まっているため、今後実現性の評価・検証を実施する。有識者（自社のDX推進担当等）へのヒアリング等で評価・ブラッシュアップを進めるとともに、ベンダ側だけでなくユーザ側に対しても変化を促す具体的な方法を検討する。